江南小

主体的に課題に向かい　ともに学び合う子の育成

～各教科における「発問」と「対話」の深め方の研究を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　笹川　力

１　研究主題について

(1) 研究主題設定の理由

ア　教育目標具現化のために

本校では、「強い子になろう」を教育目標に掲げ、児童の「生きる力」を育んでいくという理念を共有している。「生きる力」とは、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の３つの要素の調和である。昨年度は、授業の核となる部分に、児童の思考につながる「しかけ」や思考を促すような「発問」を設定することにより、課題解決に必然性が生まれ、集中して意欲的に課題に取り組もうとする場面が多く見られるようになった。また、焦点化した対話のポイントを与え、視点を明確にして対話させることで、進んで自分の考えを伝えようとする児童が増えた。さらに、友達の考えの良いところに気付いたり、自分の考えを深めたりする児童も見られた。児童同士のより良い関わり合いが見られるようになったことは、「豊かな心」を育むことにつながっていると言える。今年度は、授業のどの段階に重きを置くかを明確にし、より効果的な「対話」の場面について考え、学習の組み立てを吟味することで、主体的な深い学びを実現し「確かな学力」へとつながるように研究を進めていきたい。

イ　児童の実態から

３年計画の２年次である昨年度は、授業研究において、「発問」や「授業展開」の工夫に加えて、目的と視点を明確にした必然性のある「対話」のさせ方について取り組み、授業改善に努めてきた。視点を明確にして対話させることで、進んで意見を伝えたり、友達の考えの良さに気付いたりしながら考えを深められる児童が増えた。一方、「対話」の場面では、発言力に個人差があり、自信をもって発言できない児童もいた。今後は、各教科の授業において主体的に課題解決ができるように、より効果的な「対話」のあり方を工夫し、質の高い学び合いをさせていくことで、更に学びを深めていくことができると考え、本主題を設定した。

ウ　これまでの研究経過から

昨年度の研究を通して次のような課題が明らかになった。

①主体的で深い学びにつなげていくためには、教師が授業のどの段階に重きを置くかを明確にし、より効果的な「対話」の場面について考え、学習の組み立てを吟味していく必要があること。

②「対話」の場面で発言力に個人差があり、自信をもって発言できない児童もいるため、自信をもって発言できるようにするための手立てを考えていく必要があること。

今年度は、昨年度までの実践の積み重ねを大切にしながら、①についての研究を重点的に進めていきたいと考える。昨年度の授業研究を通して、目的と視点を明確にした必然性のある「対話」をさせることで主体的な対話の場が生じ、より深い学びにつながっていくことが明らかとなった。３年計画の３年次である今年度は、主体的で深い学びとなるために、授業のどの段階に重きを置くとよいかについて明確になるように取り組んでいきたい。

２　研究のねらい

各教科の授業において、主体的に課題に向かい、対話を通してともに学び合おうとする児童を育てるための指導のあり方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

各教科の授業において、思考を促すような「しかけ」や「発問」の工夫、重点を置く段階を明確にした授業展開を工夫することで、主体的に課題に向かい、ともに学び合う児童を育成することができると考える。

４　研究内容

(1) 児童が主体的に課題に向かうための工夫

ア 思考を促すような「しかけ」や「発問」、「授業展開」の工夫

イ どの児童にも自分の考えをもたせ、自信をもって発言するための手立ての工夫

(2) 児童同士が進んで関わり合い、深い学びにつなげていくための「対話」の工夫

ア 「対話」に必然性をもたせるための手立て

イ 「対話」の目的と視点の明確化

(3) 自己の学びを見つめ直す「振り返り」の視点の与え方の工夫

５　年間計画

(1) 授業研究等

月	日	授業研究・教材研究等
６	３０	第１回授業研究（１学年　国語） 題材名　「じどう車くらべ」 １年１組　授業者　教諭　池田　美幸
９	２２	第２回授業研究（４学年　道徳） 題材名　「せきが空いているのに」 ４年１組　授業者　教諭　上條　優美

(2) 一般研修

月	日	内　　容　　等
５	２６	児童理解研修会
７	１４	算数における問題解決的な授業展開について 講師　峯　明紀　（本校　拠点校指導教員）
８	２５	１人１台端末活用研修会 講師　石井　一二三　主任指導主事
１２	１５	描画の効果的な指導法について 講師　三浦　真弓　（本校　拠点校指導教員）
２	２２	CRT 学力テスト分析（各学年）

６　研究の成果

(1) 児童の思考を促すため、カードの使用や教材提示の工夫などのしかけをすることで、根拠を探ったり、予想とのずれから深く考えたりするなど、主体的に課題に取り組む態度につながった。
(2) 対話に必然性をもたせるために、ペアで課題解決に取り組ませた結果、間違いへの気付きや自分の考えに対する自信につながり、全体の場でも進んで発言する児童が多くなった。
(3) 全体で対話をする場面では、教師が「対話」の目的と視点を明確にするために問い返しをしたことにより、児童から多様な考えが引き出され、個々の考えの深まりや広がりにつながった。

７　研究の課題

(1) 思考を伴う課題解決に消極的な児童もいるため、「主体的に課題に向かうためのしかけや授業展開の工夫」を個に応じて日常化していく必要がある。
(2) 自分の考えを分かりやすく説明したり、正しく書いたりすることが苦手な傾向が見られるため、表現力向上に役立つ表現活動の在り方を探っていく必要がある。

（記入者　池田　美幸）